

## ゲートとフリーメーソン

著者	長谷川 茂夫
雑誌名	VERBA
巻	25
ページ	1-12
発行年	2001
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/16440">http://hdl.handle.net/10232/16440</a>

## ゲーテとフリーメーソン

長谷川 茂夫

日本人にとって馴染みの薄いフリーメーソンについて語られるとき、その結社員であった過去の著名人の一人として、ゲーテの名が挙げられることが多い。<sup>1</sup>また、『ヴィルヘルム・マイスター』連作に登場する、所謂「塔の結社(die Gesellschaft vom Turm)」がフリーメーソンをモデルとしていることも定説となっている。<sup>2</sup>

ゲーテ時代のフリーメーソンがどのようなものであったのか、その全貌を明らかにすることは、沈黙を重んじるフリーメーソンの「秘密結社」的性格からしても、非常に困難であり、本論の能くするところではない。ここでは、それが「寛容と自由を支持し、社会全般の教養向上と階級的特権の廃止と社会的不正の是正に努めることにより、政治的後期啓蒙主義とフランス革命の初期局面に極めて接近していた。」<sup>3</sup>という主張を認め、また「社交クラブ的要素」<sup>4</sup>も備えていたという理解を前提としたい。そして書簡や日記など、ゲーテがフリーメーソンに関わった資料に目を通して、フリーメーソンとしてのゲーテ像を探り出して行きたい。また、その過程で、当時のフリーメーソンの実像の少なくとも片鱗は浮かび上がってくることを期待するものである。

ゲーテはザクセン・ヴァイマル公爵カール・アウグストの招聘を受けた1775年には、既にフリーメーソンとの接触を持っていたようである。しかしこの『若きヴェールターの悩み』の作家は、積極的に入会しようとはしなかった。その間の事情を、『詩と真実』第17章<sup>5</sup>でゲーテは、自身の若年時を振り返り、こう述べている。

「ドイツの精神的・文学的地平は、当時は全くの新開拓地と見做してよかった。官吏や実業家達のなかには、この新たに開墾すべき大地のために有能な入植者や賢い家長を望む、賢明な人達がいた。私がリリーとの関係を通じて知己を得ていた重要な方々がその会員となっていた、声望があり、基盤の確かなフリーメーソン・ロッジでさえも、丁重に私の接近を促すべを心得ていた。しかし私は、後になって考えれば狂気のように思えた独立不羈の感情から、親密な結びつきに立ち入ることは、どれ

もこれも拒絶し、これらの人々が、たとえより高い意味で義務に縛られてはいても、彼らの目的に大層似通っている私の目的を目指すためには、やはり私にとって有益であるに違いなかったらうことに思い至らなかった。」

この、一見フリーメーソンの思想を肯定し、入会しなかったことを後悔しているように見える論述からまず読みとれるのは、ゲーテがやはり集団的な活動を好まなかったことであろう。また、彼にとっては自身の「目的」が最重要事であり、フリーメーソンは、その「目的」を果たすための手段としてのみ、意義を認められていることも分かる。

実際にゲーテがフリーメーソンに加入したのは、ヴァイマルで政治に携わり、枢密顧問官に任命された翌年の1780年、彼が31歳のときであった。同年の2月13日にゲーテは、当時ヴァイマルのロッジ「アンナ・アマリア」の首席マイスター (Meister vom Stuhl) を勤めていたフリッツュ男爵<sup>6</sup>に宛て入会願いの手紙を書き、加入の儀式が行われたのは聖ヨハネ祭の前日6月23日であったとされる。<sup>7</sup>またゲーテの日記にも同月23日と24日の晩にロッジへ赴いたと解される記述がある。<sup>8</sup>

「不躰とは存じますが、閣下のお手を煩わせたい請願の儀が御座います。私は久しい間、フリーメーソンの組織に加えて戴きたいという気持へのきっかけを望んでおりましたが、私どもの旅の途上<sup>9</sup>で、この希求が大層切実なものとなったので御座います。そのお人柄を知るにつれ尊敬せずにはいられない方々ともっと近くお付き合い戴けるようになるためには、この称号だけが、私に欠けていたので御座いました。従いまして、私が入会許可を賜りたく存じますのは、ひとえにこの知己を得たいという気持のなさしめるところなので御座います。私がこの願いを委ね申し上げるのに、閣下を措いて他にもっと相応しい方はいらっしゃらないことと存じます。閣下の御厚情を賜りまして、このことにながしかの御手配をして戴けますよう心待ちに致しております。またそれについてかたじけなくも御示唆を戴けますものならばと存じております。

恐惶謹言

ヴァイマル、1780年2月13日

閣下の忠実な僕たる　ゲーテ<sup>10</sup>

この極めて丁寧な言い回しで綴られた書簡の意味内容が、果たして言葉と同じよう

に謙虚であるかについては、異論を呼び起こすことだろう。ここにフリーメーソンの思想に対する直接的な共感や賛嘆の表明は見当たらない。「お人柄を知るにつれ尊敬せずにはいられない方々」との社交上必要だからという入会希望の理由が、間接的にフリーメーソン賛美になっているだけである。言い換えれば、ゲーテはフリーメーソンに加入することによる自己啓発など期待しておらず、また自分がフリーメーソンに受け入れてもらうに相応しい人間であるかどうかにかの疑念も懐いていないようである。この確信には、以前既にフリーメーソンから入会の誘いを受けているという事実が裏付けの一つにはなっているのかもしれないが、ゲーテのこの物言いを、ヴァイマルの宮廷に於いても上役であり、またゲーテを心良く思っていなかった<sup>11</sup>と伝えられるフリッツェが傲慢と受け取ったのか、又は自分を頼ってくる一途な気持と感じたのかは、謎である。

また、ゲーテの基本的な態度を暗示する逸話として、通例、入会希望者は参入儀礼の際に目隠しの布をつける決まりになっているのにも拘わらず、ゲーテはそれを拒否し、その代わりに自ら目を閉じる約束をした、という報告もなされている。<sup>12</sup>

新たな会員にはまずレーアリング (Lehrling) の階級が与えられ、その後ゲゼレ (Geselle)、マイスター (Meister) へと昇進するのが常であった。ゲーテは、早くも翌1781年3月31日にマイスターへの昇進を希望する書状をフリッツェ宛てに差し出している。

「ロッジの集会が新たに見込まれているこの機会に<sup>13</sup>、私自身の些事を閣下に委ねることをお許し願えるでしょうか。結社の規約で私が存じよらないすべてに服従することにやぶさかでは御座いませぬが、もし規則に反するのでなければ、更なる歩を進めて、本質にもっと近づきたい所存でおります。私がかく望みますのは、私自身のためのみならず、私を見知らぬ者のように扱わなければならぬことにしばしば困惑する盟友のためでもあります。もし可能でありますならば、折を見て私をマイスターの地位にまで昇進させてくだされば、幸甚に存じます。有益なる結社の素養を得るために私が今まで尽くしてきた努力を鑑みれば、私もあながちその地位に全く相応しくないわけでもなからうかと存じます。とは申しまして、すべては閣下の御厚情あふれるお心に委ねる所存で御座います。閣下への変わらぬ敬意を持ちまして

頓首再拝

1781年3月31日

ゲーテ<sup>14</sup>

自分がマイスターでないのは周りの人々にとって迷惑であるという、「利他的」な理由は、案外ゲーテの正直な感想だったのかも知れない。しかし、この年の昇進は6月23日にゲゼレの位に上がったただけであり<sup>15</sup>、ゲーテがようやくマイスターとなったのは1782年の3月2日のことで、それは、2月5日に入会したばかりのカール・アウグストと同時であった。

その僅か3ヶ月後の6月にアンア・アマーリア・ロッジは活動休止状態を余儀なくされ、フリッチュは首席マイスターを退く。それは、聖ヨハネ祭に開かれたロッジで、フリッチュの代理で首席マイスターを勤めたこともあるボーデ<sup>16</sup>と、レードナー(Redner)の職<sup>17</sup>にあったベルトウーフ<sup>18</sup>の間で、ロッジの典礼システムを巡っての軋轢が生じたため、フリッチュがロッジの活動休止も止むを得ないとの判断に至ったことによる。<sup>19</sup>

一般的に言っても、その当時のフリーメーソンの置かれていた状況は芳しいものではなかったと、ピーチュは述べている。

「当時フリーメーソンは完全な騒乱状態にあり、雑多を極めるシステムが互いに激昂して争いを起こしていた。どのシステムも自分が賢者の石を発見したと主張し、フリーメーソンの真の秘密を保持しているのは自分だと言い張っていた。イエズス会士や錬金術師や降霊術師やその類のいかさま師達がロッジに潜り込み、そこに類い希な混乱を引き起こしていた。」<sup>20</sup>

では入会の後、ロッジの閉鎖まで、即ち1780年6月25日から1782年6月まで、ゲーテはどのようにフリーメーソンと係わっていたのだろうか。その出席状況を日記で探る限りでは、ゲーテが定期的にロッジの集会に出席したという記録は見当たらない。僅かに1781年1月9日と1782年1月14日付けで「(アマーリア・ロッジ)<sup>21</sup>について(über)」とあり、またカール・アウグスト入会の当日である1782年2月5日付けで「公爵の受け入れ。11時まで(アマーリア・ロッジ)に(in)」とあるだけである。彼自身のマイスター昇進の日である3月2日には、そもそも日記の記述がない。ゲーテが全ての出席記録を日記に残したわけではないことと、この時期の日記に欠落の多いことを差し

引いて考えても、ゲーテの出席状況はあまり熱心ではなかったと言えるだろう。ゲーテはその後、イルメナウの新鉱山開発などの政務に忙殺され、日記もまた中断する。

ヴァイマルのアンア・アマーリア・ロッジが活動を公式に再開するのは1808年になるが、その間に状況は大きく変動した。ヴァイマルはフランス革命への干渉戦争とそれに続くナポレオン戦争の嵐に巻き込まれ、フランス軍による占領という苦難も甘受した。またゲーテ個人の身の上に関しても、イタリアへの逃避と帰還、シラーとの交友開始と死別などの重大な出来事が起こっていた。

ヴァイマルのロッジ再開に際しては、イエーナに於けるフリーメーソンの動静が契機となっており、ゲーテはいまやその監督を行う立場にあった。そして、その判断は決してフリーメーソンに対して好意的とは言い難いものだった。その実例を見よう。

次の引用箇所は、日付からしても明らかに、1807年12月31日のゲーテの日記に「種種の論評——イエーナの城館修理、彼の地のフリーメーソン、…」<sup>22</sup>と言及されているものに該当する。ここで表明されている意見は、当時のヴァイマルとイエーナに於けるフリーメーソンの状況を説明し、またゲーテのフリーメーソン観を赤裸々に示すものであろう。

「イエーナに於けるフリーメーソンに関して

イエーナの地に設立を目論まれているフリーメーソン・ロッジの件に関しましては、ここにあまりにも多くの由々しい事態が重なって起こるという事柄の性質上、恐らく口頭での報告をやむなくされるであろうとは存じますが、目下のところその幾分かを前もって書面でお伝え致します。

フリーメーソンは、徹底して体制中の体制(*statum in statu*)を作り上げます。一旦フリーメーソンが導入された土地では、政府はそれを支配し無害化するよう努めることになるでしょう。フリーメーソンが存在していなかったところにそれを導入することは、決して賢明ではありません。

フランス軍が侵略した際に、彼らがフリーメーソンを信奉し、愛着を抱いていること、この手段を通じてしばしば懐柔出来ることを、幾つもの事例で確認出来たとき、この古い魔よけを我が諸邦でも再び捜し出そうとする全般的な願望が生じました。私は、単に休止してただけで決して解消されてはいない当地のロッジであるアンナ・ア

マリア・ツー・デン・ドライ・ローゼン(Anna Amalia zu den drei Rosen)を新たに復活させるようにと提案致しました。そして、完全に引退したわけではない、まだ当地に残っているマイスター達が、ルードルシュタットのロッジ<sup>23</sup>との関係を絶やさずについて、しかもそのロッジが大層理性的なシュレーダー<sup>24</sup>の典礼方式を信奉することを公言していたこともあり、またアルシュテットの認可<sup>25</sup>から察するに、殿下におかれましてもこの男をお厭いではなかったことでもあり、私はこう提案致しました。この側面にも目を向けて、彼の地の典礼を取り入れ、なんとかイエーナに姉妹ロッジを設立し、それによってルードルシュタットとヴァイマルとイエーナとの間に格好の三角協調を結んだらどうかと。

これに伴い必要な準備が整えられ、イエーナの関係者全般にも通知が済んでおります。しかしながら、イエーナの者達は、その四頭体制のもと、大層支配者不在への傾向を強めており、多分にゴータの人、ルソー博士に促されてのことと察せられますが、問い合わせもなさずベルリンのツー・デン・ドライ・ヴェルトクーゲルン(zu den drei Weltkugeln)ロッジへと赴いて設立の手続きを済ませ、その後になって、どのフリーメーソン設立にも条件となっている、在地の領主の承認を願い出ております。

事態はこれにより大層不穏当に本道を外れております。イエーナはゴータとベルリンとに関係を結び、方々が何と申されましようとも、それによりヴァイマルとルードルシュタットへの本来の内的関係は不可能となります。それらのロッジはこれにより独り立ちにされます。そして、この組織の動きを知る者ならば、この状況下で、そのようなロッジの監督をうまくやり通せるなどと自分を欺いたりするのは無駄であると分かります。

以前既にイエーナにロッジを一つ作り上げようという構想がありました。イエーナの盟友達は、ヴァイマルの盟友達を頼り、そのなかで、首席大臣にして警察長官であるフォン・ブリッチュ男爵が首席マイスターでありました。ここで木樵<sup>26</sup>は正しいものの中にあり、そして以後も同様となる筈ではありました。

ではとりあえずイエーナを隔離されているとして、同所でのロッジの影響を考量してみましよう。マレツォル<sup>27</sup>が首席マイスターとなり、商人のメツェル<sup>28</sup>、オットー<sup>29</sup>等もしかししたら彼を補佐するかも知れません。シュタルク<sup>30</sup>のジュニア<sup>31</sup>がそれに組みした

がるように見えます。他の者達は、領主の承認を先取りしたくないために控えています。私の存じている限りでは、30名の者達が参集出来るようです。その後はカーラとドルンブルクにまで版図を延ばし、出来る限り東方へも働きかけることでしょう。これによってみえることは、そこでもまたさらに30名の人間がそれに加わったりしたならば、そのすべてが行政府の公務員およびその他何であれ公職についている者達であり、この結社に含まれてしまうだろうということです。もし彼らが、行動力があり先取の気質に富んでいる人間を頂点に頂いたとしたなら、かくも小さな国家に於いて彼らが如何なる政治的比重を持ちうるかは、即座に見て取れます。

イエーナの最大の弊害はとりもなおさず、平行的および相互的に機能する、あまりにも多くの団体や機関が、その地に存在することです。一つの団体、それも大層強力となりえて、多大な紛糾と鬱憤とを伴わなければ再び手を切ることの覚束ない団体を、このアナルキーな状態の中へ設立することがどうして賢明でありえましょうか。しかも外的な諸関係ゆえに、内政の総てにわたってもっと統一を達成するように私達が望まざるを得ないこの時期に。

ただ一つ心に留めておくべきこととして、もしこのような結社がアカデミーと軌を一にするようになった場合、それによって両者ともに勢力を増大させることになるでしょうし、また構成員の志向と都合に応じて、その力を次には行政府に振り向けることも、ひとえにその者達次第であるということです。

事態を別の側面から考察するため、こう想像してみましょう。医学部が対立者だらけだった、かつての時代なら、グルーナー<sup>32</sup>かローダー<sup>33</sup>かシュタルクかが首席マイスターだったことでしょう。自分の敵対者の命を4分の1ばかり萎縮させてやるには、何と素晴らしい機会でしょうか。新来の若い教授達は、それぞれが或る党派への対応次第で多かれ少なかれ、抑圧と依存の関係に立ちます。もし首席マイスターと副首席マイスター達(die Brüder Vorsther)が価値のある者の頭を押さえつけ、無価値な者を引き立てたとしたなら、まずどうなることでしょうか。

学業にいそんでいる者達のため胡乱なことを全く考えないこと、これが以前には常にイエーナでフリーメーソンの結社をすべて排斥してきた眼目ではあったのですが。



ところで、このフリーメーソンの結社組織が大都会に於いて、粗野な大衆に対しては完全に具合良く機能したであろうし、また機能するであろうことを、私は否定するつもりはありません。また、例えばルードルシュタットのように小さな土地でも、そのような施設は社交の一形態として役に立ちます。ここヴァイマルでは、私達はそもそもフリーメーソンを全く必要とはしておりませんし、そしてイエーナのためには、上述の理由および他の幾つもの理由からして、私はフリーメーソンを危険であると見做します。そして、もし承認の初めの半年の間にロッジを構成する陣容の全員を、いますぐ披露してみせることが出来る者なら、だれでもこの件を胡乱に思うことでしょう。

言い過ぎたことまた言い足りなかったことにお許しを願いながら  
ヴァイマル、1807年12月31日

ゲーテ

ことほどさように全体へと波及する施設に関し、グリースバッハ<sup>34</sup>の如き人物に意見を求めようとするならば、その場合は、私が大変な思い違いをしているに違いないか、又は、上述の私の文章に対して大層広範な論評をつける仕儀になるでしょう。またこの件は他の宮廷に対しても、微妙で他の出方を伺う側面を持っています。というのも、それらの宮廷の、就中ゴータの、司法・財務官達、そして村落の聖職者もまげずおとらず、徐々に関与してくることでしょうから。」<sup>35</sup>

これは、ヴァイマルのロッジ関係者がイエーナに於ける自らの支配下に入らない一派の誕生を阻止しようとする、フリーメーソン内の覇権争いなどではなく、フリーメーソンそのものに対する痛烈な批判となっており、施政者の視点を中心に据えたこの報告が、自らもフリーメーソンの一員である人物によって書かれたものであるとは、俄には信じがたい趣さえある。

フリーメーソンに対するこのような批判的見解、特に「イエーナが或るロッジによって脅かされている」<sup>36</sup>という懸念は、既に以前からゲーテのうちに存在していたようである。1789年4月6日付けのカール・アウグスト宛ての書簡の中で使われている表現の中には、「秘密結社の悪事」、「愚か者・悪漢達」という手厳しい言葉さえも含まれている。<sup>37</sup>

ヴァイマルのロッジ再開に先立つ 1808 年 5 月 11 日にゲーテは、ルードルシュタットのロッジに対して協力を求める文書を添えた書簡をベルトウーフに送り、自分の措置がカール・アウグストの意向でもあることを言明して、それが速やかに実行されることを要望している。<sup>38</sup>

そしてゲーテの意見に沿った形で、1808 年 10 月 24 日にベルトウーフを首席マイスターとし、シュレーダーの典礼方式を採用して、アンナ・アマーリア・ロッジは再開された。ゲーテは会員として名簿の 13 番目に名を連ねている。<sup>39</sup>しかし、ゲーテ自身はその祝典を欠席した。その日イエーナにいたゲーテが晩の会合に間に合うようヴァイマルへ出発しようとしたが、公爵妃が翌日到着することが伝えられたため、その地を離れるわけにいかない、という理由であった。<sup>40</sup>

1810 年にベルトウーフが首席マイスターを辞するにあたって、諸方からゲーテの就任を望む声があがったが、彼は固持したとも伝えられる。<sup>41</sup>

1812 年にゲーテは、恒久的な欠席の許可願いを時の首席マイスターであるリーダー<sup>42</sup>に提出し、以後は主に息子のアウグストから間接的にロッジの様子を聞くことになる。

「閣下

特に御高配を賜りまして、何かしかるべき、フリーメーソンの形式に背かぬ流儀で私を不在者と見做して戴き、結社に対する私の義務を免除して戴きますれば、幸甚に存じます。この荣誉ある、有益な絆を完全に断念致しますことは心苦しい仕儀では御座いますが、定期的にロッジに同席致しますことは私には叶わぬと思われますゆえ、私の長期欠席によって悪しき例を成したくは御座いません。詳細はお目に掛かった折りにお話を伺うことも御座いましょう。それまでは申し訳も差し控えさせて戴きます。敬具

ワイマル 1812 年 10 月 5 日

ゲーテ<sup>43</sup>

引退後にも時に応じてゲーテがロッジの行事に関わることも無いわけではなかった。1813 年にはヴィーラントの死に臨んで弔辞を捧げた。<sup>44</sup>ピーチュによれば不定期にレードナー職を勤めたようであり、詩作でロッジに貢献することもあった。<sup>45</sup>また 1830 年には自身の 50 年祭に名誉会員の証書を受けた。<sup>46</sup>同年 6 月 24 日の日記に

ゲーテはこう記している。

「昨日がその当日だった私のフリーメーソン50周年が、本日、聖ヨハネ祭のロッジで祝われた。私は沈黙を守って、ジョンにこれまでの仕事の校訂の続きを口述筆記させた。」<sup>47</sup>

ゲーテは確かにフリーメーソンの一員であり、彼の息子アウグストもまたフリーメーソンであったことから、加入の必要性を認めてはいたのだが、それは彼が「擬似秘教(Quasi-Mysterien)」<sup>48</sup>とさえ呼んだことのあるフリーメーソンの運動に共感し自らも積極的に活動したいがためではなかったと結論づけてもよいだろう。フリーメーソン自体も、ゲーテが『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』で描いた、所謂「教育州」を実現するような組織とは全くかけ離れていた。即ち、「塔の結社」は、現実のフリーメーソンとは全く別種の、理想的な組織なのである。そして、そのどちらがゲーテにとって、より深い関心と呼ぶものであるかは、容易に想像出来る。

---

註

- <sup>1</sup> 例えば、吉村 正和、『フリーメーソン 西洋神秘主義の変容』講談社現代新書。1999年 第二〇刷。10頁。
- <sup>2</sup> 例えば、小宮 豊隆訳『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』下。岩波文庫。昭和三十七年 第十刷。301頁。
- <sup>3</sup> Helmut Reinalter: Die Freimaurer. München (C. H. Beck) 2000, S. 18.
- <sup>4</sup> 吉村 正和。54頁。
- <sup>5</sup> Goethes Werke. HA, B. 10, S. 112.
- <sup>6</sup> Fritsch, Jakob Friedrich von. (1731-1814). ザクセン・ヴァイマルの国務大臣、枢密評議会の長官。
- <sup>7</sup> Vgl. J. Pietsch: Johann Wolfgang v. Goethe als Freimaurer. Leipzig (Bruno Zechel) 1880, S. 9.
- <sup>8</sup> Vgl. Goethes Werke. WA, III. Abteilung, Bd. 1, S. 120 und S. 346. ゲーテは日記内でアマリア・ロッジを表すのに特殊な記号(長方形)を用いていた。
- <sup>9</sup> ゲーテが1779年にカール・アウグストに随伴したスイス旅行を指すものであろうか。
- <sup>10</sup> WA, IV. Abteilung, Bd. 4, S. 176.
- <sup>11</sup> Vgl. Eugen Lennhoff/ Oskar Posner/ Dieter A. Binder: Internationales Freimaurer Lexikon. München (Herbig) 2000, S. 353. またフリッチュはゲーテの入会に際し、自分が関与することを避けるために、首席マイスターの職務をボーデ(註16参照)に執らせたという説もある。Vgl. Pietsch, a.a.O., S. 9.
- <sup>12</sup> Ebd.

- 
- <sup>13</sup> ロッジの定例集会は、毎年 6 月 24 日と 10 月 14 日の祝祭日、及び各月の最初の火曜日であった。Vgl. Pietsch, a.a.O., S. 22.
- <sup>14</sup> WA, IV. Abteilung, Bd. 5, S. 102.
- <sup>15</sup> Vgl. Pietsch, a.a.O., S. 12.
- <sup>16</sup> Bode, Johann Joachim Christoph. (1730-1793). 作曲家、作家、出版者。ゲーテの『ゲッツ』も出版した。
- <sup>17</sup> アングロ・サクソン系のロッジには見られず、大陸のロッジだけにある役職で、フリーメーソンの意識を高めるための講演などを受け持ったとされる。Vgl. Internationales Freimaurer Lexikon, a.a.O., S. 694.
- <sup>18</sup> Bertuch, Friedrich Johann Justin. (1747-1822). 作家、出版業者、企業家。カール・アウグスト公爵の枢密秘書官、財務管理人、後に公使館参事官
- <sup>19</sup> Pietsch, a.a.O., S. 14 f.
- <sup>20</sup> Pietsch, a.a.O., S. 15.
- <sup>21</sup> 上述したように、ゲーテは日記中で独自の記号を用いていたため、ここで(アマリア・ロッジ)とあるのは、その記号を読み替えたものである。
- <sup>22</sup> WA, III. Abteilung, Bd. 3, S. 311. 省略は筆者による。
- <sup>23</sup> Günther zum stehenden Löwen. Vgl. Pietsch, a.a.O., S. 17.
- <sup>24</sup> Schröder, Friedrich Ludwig. (1744-1816). ハンブルクの劇場監督、俳優。当時各地のロッジで混乱を極めていた典礼方式を「本来の純粋性」に戻したとされる。Vgl. Internationales Freimaurer Lexikon, a.a.O., S. 759.
- <sup>25</sup> アルシュテットのロッジ「カール・アウグスト」は数年しか続かなかつたとされる。Vgl. WA, I. Abteilung, Bd. 53, S. 523.
- <sup>26</sup> 主席マイスターは、その職の象徴として木槌を手にする慣わしだった。
- <sup>27</sup> Marezoll, Johann Gottlieb. (1761-1828). この人のことか。プロテスタントの神学者、イエーナ大学教授。
- <sup>28</sup> Metzel, Johann Christoph. プロテスタントの聖職者、イエーナの大執事 (Archidiaconus) と別人であることを示すために「商人」と言っているのかも知れない。
- <sup>29</sup> Otto, Johann Friedrich Gottlob. (1749-1826). 宮廷顧問、イエーナの豪商。
- <sup>30</sup> Stark, Johann Christian. (1753-1811). 1779 年からイエーナ大学の医学教授、1786 年にカール・アウグスト公爵の侍医。
- <sup>31</sup> 上の Johann Christian Stark の甥で同名の Johann Christian (1769-1837)、又は息子の Karl Wilhelm (1787-1845) のいずれかであろう。前者は、医師。イエーナ大学の医学教授。1812 年からヴァイマルの侍医。後者は、ヴァイマルの宮廷医師。イエーナ大学の医学教授。
- <sup>32</sup> Gruner, Christian Gottfried. 医師、宮廷顧問官。1773 年からイエーナ大学の植物学教授。
- <sup>33</sup> Loder, Justus Christian (1753-1832). 解剖学者、1778 年にイエーナ大学教授、1781 年にザクセン・ヴァイマルの侍医、1782 年に宮廷顧問官。
- <sup>34</sup> Griesbach, Johann Jakob. (1745-1812). プロテスタントの神学者、作家。1775 年

---

イエーナ大学教授。

<sup>35</sup> WA, I. Abteilung, Bd. 53, S. 306 ff.

<sup>36</sup> Vgl. WA, IV. Abteilung, Bd. 9, S. 101.

<sup>37</sup> Ebd.

<sup>38</sup> Vgl. WA, IV. Abteilung, Bd. 20, S. 32 ff. また、別の添付文書ではベルトウーフをヴァイマルのロッジの首席マイスターに推薦している。Vgl. WA, IV. Abteilung, Bd. 30, S. 113.

<sup>39</sup> Vgl. Pietsch, a.a.O., S. 21.

<sup>40</sup> Vgl. WA, III. Abteilung, Bd. 3, S. 394, und WA, IV. Abteilung, Bd. 20, S. 186.

<sup>41</sup> Vgl. Pietsch, a.a.O., S. 25.

<sup>42</sup> Ridel, Johann Cornelius Rudolf (1759-1821). 財政局参議官。皇太子 Karl Friedrich の教育係。

<sup>43</sup> WA, IV. Abteilung, Bd. 23, S. 108 f.

<sup>44</sup> Vgl. WA, IV. Abteilung, Bd. 23, S. 302. Goethes Brief an Schlosser vom 26. März. 1813.

<sup>45</sup> Vgl. Pietsch, a.a.O., S. 26, und WA, I. Abteilung, Bd. 3, S. 58ff. ここに Loge という表題で纏められている作品群には、その時に使われたと思われるものが含まれている。

<sup>46</sup> Vgl. Pietsch, a.a.O., S. 27.

<sup>47</sup> WA, III. Abteilung, Bd. 12, S. 261 f.

<sup>48</sup> WA, IV. Abteilung, Bd. 30, S. 112.